報告

2011 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

日置善郎 [1)]　宮田政徳 [1)]　川野卓二 [1)]　香川順子 [1)]　吉田　博 [1)]　奈良理恵 [2)]
[1)] 徳島大学大学開放実践センター
[2)] 徳島大学学務部教育支援課総務・企画係

（キーワード：初任者研修、FD ファシリテーター養成研修、授業コンサルテーション、FD・SD セミナー、大学教育カンファレンス）

An annual report 2011 on campus wide Faculty Development programs at The University of Tokushima

ZenroHIOKI[1)]　Masanori MIYATA[1)]　Takuji KAWANO[1)]　Junko KAGAWA[1)]
Hiroshi YOSHIDA[1)]　Rie NARA[2)]
[1)] Center for University Extension, The University of Tokushima
[2)] Student Affairs Department, Curriculum Support Section, The University of Tokushima

(Key words: new faculty seminars, FD facilitator training seminars, individual consultations, education conference)

1. はじめに

全学 FD 推進プログラムも本年度から第 4 期に入り、FD の必要性・重要性の理解は、徐々にではあるが学内外で深まりつつあると思われる。これを更に発展させるべく、今年度も前年度に引き続き、FD ファシリテーター養成研修、教育力開発基礎プログラム、授業コンサルテーション・授業研究会、FD・SD セミナー、大学教育カンファレンス in 徳島を計画通り実施した。

各プログラムの役割は、「初任者研修」としての『教育力開発基礎プログラム及び授業コンサルテーション・授業研究会』、「学部 FD 実施者向け」の『FD ファシリテーター養成研修』、「話題提供者を囲む懇談の場」としての『FD・SD セミナー』、「特色ある教育実践・研究発表の場」としての『大学教育カンファレンス』、と位置づけられており、全体の体系性も常に意識して運営されている。

また、一昨年度より、FD ファシリテーター養成研修を SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）に開放して徳島大学外からの参加者も受け入れており、同様に、教育力開発基礎プログラム、FD・SD セミナー、大学教育カンファレンス in 徳島も SPOD 開放プログラムとしている。

これらのプログラムは、アンケート結果及びワークショップ等の実施状況から見て、一定の成果を上げていると言えよう。しかしながら、教育力開発基礎プログラムおよびその受講者に対する授業コンサルテーション・授業研究会の意義については、必ずしも対象者全員に浸透しているとは見受けられない点は反省材料である。

この問題については FD 専門委員会においても議論し、各学部・部局の FD 専門委員からも対象教員に働きかけ、粘り強く理解を求める努力を続けることとした。このような改善を通じて同プログラムがより有効なものとなるよう今後も努めていきたい。

FD 実施組織の在り方（将来像）に関しては、教育担当副学長のリーダーシップの下、教育戦略本部会議において全学的 FD 推進をこれまで以上に効果的に推進できる体制を目指して検討を重ねている。

このように、組織、システム及びプログラムを継続的に整備することが、徳島大学全学 FD の更なる発展にとって極めて重要と考えられる。

以下、2〜6 において、今年度の各プログラムの実施内容を具体的に述べる。

2. FD ファシリテーター養成研修

a. ねらい

2011 年 2 月の大学教育委員会において「徳島大

学FD推進プログラム第４期計画(2011/4-2014/3)」が決定され、これに基づき年度ごとに「全学 FD推進プログラム実施計画」を策定の上、FD 活動を推進することとなった。2011 年度は第４期計画の一年目にあたり、昨年度の成果と反省に基づき、その内容を改善した上で、2011 年度 FD 推進プログラムの一環として「FD ファシリテーター養成研修」（合宿ワークショップ研修）を実施した。

このプログラムの目標は次のとおりである。

①FD 活動の理念と活動計画を理解する
②部局等の FD プログラムを開発する
③FD リーダーとして活動できる能力と資質を体得する
④FD リーダー間の仲間づくり、FD ネットワークづくりをする

対象者は、各学部・共通教育センターFD 委員会委員及び中堅以上の教員２名以上とした。その他、昨年度から T-SPOD（徳島県下 FD ネットワーク）参加校及び SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）の東部地区加盟校（香川県内）にも参加者を拡大した。プログラム内容は、FD ニーズの把握から企画の立案及びプログラム評価の方法までを、レクチャーとワークショップを通じて体得し、FD 企画の立案能力を向上させることを目標とした。これまで以上に、明確な目標を設定し、実践的内容をもったプログラムを実施した。

研修には、学外から阿南工業高等専門学校の松本高志先生を講師としてお迎えし、プログラムを実施した。

b. 概要

■開催期日

2011 年６月 25 日（土）～6 月 26 日（日）

■会場

独立行政法人「国立淡路青少年交流の家」
（兵庫県南あわじ市阿万塩屋 757- 39）

■参加者

【学部 FD 委員等】

氏　名	所　属	職　名
大橋　守	総合科学部	教　授
大橋　眞	総合科学部	教　授
片岡三佳	医　学　部	准教授
阪間　稔	医　学　部	准教授
伊賀弘起	歯　学　部	教　授
片岡宏介	歯　学　部	准教授
田中秀治	薬　学　部	教　授
佐藤陽一	薬　学　部	准教授
西尾芳文	工　学　部	教　授
大屋英稔	工　学　部	准教授
有馬卓也	全学共通教育ｾﾝﾀｰ	教　授
ﾃﾞｨﾙｸ・ｸﾚﾒﾝｽ・ｷﾞｭﾝﾀｰ	全学共通教育ｾﾝﾀｰ	准教授

【T-SPOD 及び SPOD 東四国】

氏　名	所　属	職　名
古田　昇	徳島文理大学	教　授
小林郁典	徳島文理大学	准教授
渡邊正知	徳島文理大学	准教授
得丸博史	徳島文理大学	准教授
下坂　剛	四国大学	講　師
葛城浩一	香川大学	准教授
藤本佳奈	香川大学	特命助教
野口里美	香川大学	チーフ

■学内外講師等

氏　名	所　属	職　名
松本高志	阿南工業高等専門学校	准教授

■運営メンバー

氏　名	所　属	職　名
和田　眞		副学長
日置善郎	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	センター長
川野卓二	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	教　授
宮田政徳	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	准教授
香川順子	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	准教授
吉田　博	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	助　教
坂東健一	学務部教育支援課	教育支援課長
槌谷和也	学務部教育支援課	総務・企画係長
奈良理恵	学務部教育支援課	FD ﾏﾈｰｼﾞｬｰ

■内容

２日間にわたって表１のプログラムを実施した。

表１　2011 年度 FD ファシリテーター養成研修日程

第１日（2011 年 6 月 25 日・土曜日）

8:40 徳島大学出発
9:30 国立淡路青少年交流の家到着

時　刻	内　　容	講師・担当者	場　所
9:30－10:00	・記念写真撮影、部屋の確認、会場設営	研修事務局	特別第１研修室
10:00－10:30	(1)オリエンテーション ・FD への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介	副学長（教育担当） 和田　眞 FD 専門委員会委員長 日置善郎 （進行）川野卓二	特別第１研修室
10:30－11:30	(2)アイスブレーク＆ World Cafe	吉田　博	特別第１研修室
11:30－11:40	休憩		
11:40－12:10	(3)講義：FD 理解（定義と種類）	宮田政徳	特別第１研修室
12:10－13:00	昼食(12:20～12:50)　休憩		食　堂
13:00－14:00	(4)講義：FD ファシリテーター養成研修と部局 FD ①：総合科学部 FD の場合 ②：阿南高専 FD の場合	大橋　眞 松本高志	特別第１研修室
14:00－14:10	休憩		
14:10－17:50	(5)ワーク①：FD の課題の把握 (6)ワーク②：FD プログラムの企画・立案 (7)ワーク③：FD プログラム評価シート作成	川野卓二、香川順子 松本高志 他スタッフ全員	特別第１研修室
17:50－18:30	夕食（18:00～18:30）　休憩		食　堂
18:30－19:30	自由時間		
19:30－20:30	(8)FD 交流会	吉田　博	食　堂
20:30－22:30	風呂他　（入浴時間 21:30～22:00）		浴　室

22:30 就寝及び消灯

第２日（2011 年 6 月 26 日・日曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者	場　所
7:00－7:20	朝のつどい		つどいの広場
7:20－8:30	朝食（7:20～7:45）　掃除（点検・退室）		食堂・宿泊室
8:30－10:30	(9)ワーク④：FD プログラム作成と仕上げ	松本高志 他スタッフ全員	特別第１研修室
10:30－10:40	休憩		
10:40－12:00	(10)ワーク⑤：FD プログラム発表・質疑応答	FD 専門員会委員長 日置善郎 香川順子、吉田　博	特別第１研修室
12:00－13:00	昼食(12:20～12:50)　休憩		食　堂
13:00－13:30	(11)プログラムのまとめ ・講評 ・参加証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	副学長（教育担当） 和田　眞 FD 専門委員会委員長 日置善郎 （進行）宮田政徳	特別第１研修室

13:40 バス発車－ 14:30　常三島キャンパス着

c. 成果と課題

プログラム終了直後にとった、参加者へのアンケート結果を示す。以下に、各問いに対する自由記述の回答例を挙げる。

(1) 今回のFDファシリテーター養成研修に参加するにあたってあなたの自己目標はなんですか？身につけたいスキル・知識は何ですか。

・多くの教員との出会い
・特に設定した目標はなく、少しでも得るものがあればと考えていた
・FDの必要性について学びたい
・他大学のFDの現状把握とFDファシリテーターのための技術の修得
・FDは、教員の意識に大きく依存すると考えるが、その意識を変えるためには、具体的にどのような方略を立て、どのように評価することで意識改善が見込めるのかを習得してみたい
・さまざまなFDファシリテーター養成の研修にふれること
・FDについて、より理解を深め、今後の活動に活かす。他大学、他学部の先生方と交流を深める。
・他機関、他部局のFDプログラム事例を知りたい
・研修プログラムを作成する（概ね完成させる）
・FDプログラムをつくる
・FD、PD、SD企画の手順、必要事項を知ることができる。他大学のFDの現状を知ることができる。具体的なPD研修を企画・立案することができる。
・他部局、他機関の先生と知りあいになり、様々な考え方や情報を取得すること
・FDについてより深く理解する
・FDの理解と意義
・英語プレゼンや講義
・FDの意義・重要性を他人にも理解・説明できるようにFDに関する基礎知識を身につけること。そのためにどうのようなスキルがあるのかを知り、1つでも2つでもいいのでスキルの構築法を身につけたい。

(2) 参加して良かったと思われる点を具体的にお書き下さい。

・FDに関する問題点を共有できた。教員との新しい出会い。
・特にありませんが、「出席者が少なくてもよい」、「早急に結果を求める必要はない」という一見マイナスに思える点をプラスに転ずる発想を手に入れたことは大きかったように思います
・他部局との交流ができ、またFDの目的について理解できた
・FDに関する知識を修得できた。関係者とさまざまな交流ができた
・他大学のFDに対する取り組みが理解できた
・いろいろな立場の、他大学の方々と交流できたこと
・仲間ができたこと。また、よいプロダクトができたこと。
・FDについて詳しく知ることができた。また、他大学・他部局の先生方と交流ができた。
・教員間ネットワークができ、FDの事例を学んだ。またFDについて時間をかけて考えた。
・人的ネットワークができ、研修プログラムを作成できた。
・FDプログラムをつくることができた
・FDの企画手順等がわかった。また、FDの運営についても勉強になった。新たな人とのつながりも持てた。
・「新たな人的つながり」に尽きると思います。夜遅くまで酒を飲みながら、理屈や綺麗事ではない、教育etcのことを語り合えたのは実に楽しいことでした。
・雑談の中で受けたアドバイス。個人的に大学教員としての身のふり方で悩んでいることで示唆が得られた。
・FDプログラムの作成手順が理解できた
・交流が深めて良かったと思う
・他部局や他大学の方のFDの現況が理解でき、また交流も出来た

(3) 研修内容について改善すべき点があれば、具体的にお書き下さい。

・予算などの関係もあるので、ここで0（ゼロ）

から作るよりも、ある程度各部局で構想されたものを精査する、という形にした方が実効的ではないのか
・他大学の FD についてもう少し紹介があれば、参考になるのでよいと思った
・ワークのとき、ある程度範囲をしぼってはどうでしょうか？
・講義と作業のメリハリが不十分でだらだらと進行している感がある。また、作業の途中にコンサルタントあるいはタスクによるアドバイスや介入がほとんど無いため、作業内容がどのていど適切かどうかがわからなかった。より良い研修をするためには、先ず、スタッフの育成・研修が重要と考える。
・スライドのスクリーンの位置がもう少し高いと、後ろからも見えやすいと思いました
・セッションごとの作業がわかりにくい。説明をもっと明確にしてほしいと思いました。各グループにタスクフォースをつけ、脱線しないように軌道修正する必要がある。
・あまり暑くない時期がよいと思う。暑がりには厳しい。青少年の家でやらなくてもよいかも。もう少しリラックスできるような場所はないものか？
・作業の説明をもうすこし、丁寧にやっていただければ、ありがたかったです。例えば、プレゼンの内容、時間の説明等。
・昨年よりも準備ができていなかったように思う。プリントの準備などやワークの指示もわかりにくい部分があった。
・他大学から参加の場合は 2 名以上を必須にした方がよい
・FD 委員ではない、新たな参加者を開拓してゆくこと。また参加すれば意義があり楽しいとは皆に話していますが、土・日がつぶれることでいやがる教員が多い（私たち、教員は「振替休暇」を取らされても、実際は休めない）。曜日については検討の余地があると思います。
・FD 講師の先生方は、ご苦労が多かったと思います。お疲れさまでした。しかし、1 日目午後（14：10〜17：50 のもの）の講義は分かりにくく、受講者への配慮があまりにも足りないと感じた。（例）：きちんと具体例を示して、作業させる、また参加者のグルーピングに配慮する。
・参加者が固定しているように思った
・蒸し暑く、眠りが浅かった

参加者へのアンケートの他の項目の結果では、プログラムに関しての設問「研修の目的は明確に設定されていた」で、そう思うが 42%、どちらかといえばそう思うが 58%であった。また会場に関しての設問「研修会場は快適な環境だった」で、そう思うが 37%、どちらかといえばそう思うが 32%であった。運営関しての設問「スタッフは手際よく研修を運営していた」で、そう思うが 68%、どちらかといえばそう思うが 32%であった。

この研修で各大学・学部・学科で FD を企画・実施する立場の参加者に対して、所期の目的を達成することができたと思われる。このプログラムのワークの中で、FD プログラムを作成することが FD ファシリテーターとしての自覚につながり、FD 担当者にとって有意義なワークになったと考えられる。来年度からの研修プログラムについてもアンケート結果を取り入れて可能な限り手直ししたい。

今年度の研修最後に発表された各大学の部局 FD プログラムを見ると、学部における初任者研修等、適切な内容と構成をもったものが多く、部局 FD を実施できる人材が確実に育って来ていることが分かる。次年度以降も、このプログラムの効果を検証しつつ、FD ファシリテーター養成の場をより実質的なものにして行かなければならないだろう。

3. 教育力開発基礎プログラム

実質的な FD の取り組みを進めるため、徳島大学の教育の質向上及び問題解決のための相互交流と日常的な教育改善のための研修である「教育力開発基礎プログラム」を実施した。本節では、その研修内容について報告する。

a. ねらい

本研修は、大きく分けて授業設計と教育技術に

ついて学ぶものである。主な活動内容は、シラバスと授業計画の作成、模擬授業である。授業の目的、到達目標の設定、授業実施の留意点、評価方法等に関する講義やワークを通して、参加者が自身の授業について考え、振り返ることにより、実践的な教育力の向上を目指している。本プログラムの目標は以下の４つである。

①FD 活動の理念、活動計画を理解する
②授業を計画し、実施し、評価する方法を体得する
③授業研究の仕方を理解し、実践できるようにする
④FD 参加者同士の仲間づくりをする

b. 概要

■開催期日

2011 年 8 月 19 日（金）～8 月 20 日（土）

■会場

共通教育棟 6 号館 201 講義室（大学開放実践センター2 階）

■対象者

本研修は学外へ開放しているため、学内のみではなく、学外の教員も対象としている。

学内の対象者は、講師または准教授昇任後 2 年以内の教員、学部から推薦を受けた者（助教及び教授等）、2010 年度「教育力開発基礎プログラム」欠席者とした。ただし、所属が学部以外のセンター等、病院の場合、及びプロジェクト採用などの場合は除いた。また、次に該当する場合は参加を免除した。①学外で同様の研修を受けた場合、②担当する授業がない場合、③診療業務を主に担当している場合。

学外の対象者については、徳島県の大学・短大・高専（T-SPOD）及びその他 SPOD 加盟校の教員とした。

■参加者

今年度の参加者は、教員 21 名（徳島大学 16 名、T-SPOD5 名）であり、詳細は次の通りである。

【学内教員】

氏　名	所　属	職名
山本　孝	総合科学部	准教授
座喜　純	総合科学部	准教授
吉岡宏祐	総合科学部	講　師
後東久嗣	医　学　部	講　師
村尾和俊	医　学　部	講　師
田嶋　敦	医　学　部	准教授
馬渡一諭	医　学　部	講　師
瀬川博子	医　学　部	講　師
石走知子	医　学　部	講　師
松本高広	医　学　部	准教授
佐藤陽一	薬　学　部	准教授
蒋　景彩	工　学　部	准教授
日下一也	工　学　部	講　師
名田　譲	工　学　部	講　師
ANTONIO NORIO NAKAGAITO	工　学　部	講　師
松浦健二	情報化推進ｾﾝﾀｰ	准教授

【学外教員（T-SPOD）】

氏　名	所　属	職名
松尾俊寛	阿南工業高等専門学校	講　師
松浦史法	阿南工業高等専門学校	助　教
安田武司	阿南工業高等専門学校	助　教
福栄堅治	徳島工業短期大学	講　師
植木正二	徳島文理大学	講　師

■運営メンバー

運営メンバーは、副学長（教育担当）、大学開放実践センター長（FD 専門委員会委員長）、FD 専門委員会委員を含め、教員 15 名、FD マネージャー1 名、職員 1 名の計 17 名で運営を行った。

氏　名	所　属	職名
和田　眞		副学長
日置善郎	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	ｾﾝﾀｰ長
前澤　博	医　学　部	教　授
小山晋之	総合科学部	教　授
田中秀治	薬　学　部	教　授
西尾芳文	工　学　部	教　授
上田哲史	情報化推進ｾﾝﾀｰ	教　授
堤　和博	全学共通教育ｾﾝﾀｰ	准教授
武田英二	医　学　部	教　授
岩佐幸恵	医　学　部	准教授
金西計英	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	教　授
川野卓二	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	教　授

次ページへつづく

宮田政徳	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	准教授
香川順子	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	准教授
吉田　博	大学開放実践ｾﾝﾀｰ	助　教
槌谷和也	学務部教育支援課	係　長
奈良理恵	学務部教育支援課	FDﾏﾈｰｼﾞｬｰ

■内容

２日間にわたり、表２のプログラムを実施した。

■全体の流れ

[1 日目]

「(1) オリエンテーション」では、和田副学長より「大学教育、FD・SD への期待」について、日置 FD 専門委員会委員長より「研修のねらいと意義」についてお話を頂いた。

「(2) アイスブレイク」では、参加者間の交流と自己紹介のため、教員としての川柳作成と披露を行った。作成後、作品を会場に掲示し、参加者やスタッフなどの関係者による投票で優秀賞を決めた。受賞式は研修の最後に行った。

「(3) ワークショップ　良い授業・悪い授業」では、授業を実施する上での留意点を理解し、教育活動の振り返りと今後の取り組み方について再考するためのワークを行った。初めに、学生の授業評価コメントを参考にしながら、良い授業・悪い授業について考え、グループごとに KJ 法を用いてキーワードを整理した。その後、グループ間で情報共有を行った。これらの活動を通して、自身の授業の特長や改善点、今後の課題について振り返りを行った。

「(4) ワークショップ　私の授業で大切にしたいこと」では、個人ワークで授業イメージの明確化を行い、グループ内で授業に関わる問題共有・相互支援を行った。個人ワークでは、現在の取り組み、理想の教育と教員像（目標）、目標達成の阻害要因について書き出すワークを行った。その後、グループ内で個人の授業について情報交換し、相互支援の時間を設けた。一人一人の問題についてグループの成員が協力しながら、共に考え、問題解決していくための話し合いを取り入れ、関係性の構築を目指した。

「(5) 講義・ワーク　よりよい授業実施のために」では、Significant Learning（意義ある学習）を目指す授業設計について講義・ワークを行った。具体的には、授業設計のための 12 ステップが示され、初期段階、中間段階、最終段階でのポイントの解説を行った。ワークでは、この Significant Learning に基づき、学習目標、評価活動、学習活動について振り返りを行った。最後に、「教育実践を記録・顕在化し、それを教師同士が分かち、互いに吟味しあい、互いの教授・学習に関する実践的知識を積み重ねあう試み」として SoTL(Scholarship of Teaching and Learning)[注1)]が紹介された。

「(6) グループワーク　模擬授業の計画と準備」では、グループごとに各部屋に分かれて、参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 専門委員会委員、大学開放実践センター教員が司会、支援スタッフとして入り、支援を行った。模擬授業の内容については、各教員の担当科目を想定し、研修前に事前準備を行ったうえで実施された。参加者は学生の立場から授業に参加した後、授業を検討するための要点チェックリストに基づいた授業の検討を行い、この他にも良かった点、より良くするための改善点について自由記述形式で用紙に記入し、模擬授業実施者へのフィードバックを行った。全員が模擬授業を終えた段階で、2 日目に全体で発表する代表者を選抜した。そのほか、司会、他グループの模擬授業代表者へのコメンテーター、タイムキーパーの役割を決定し、参加者自身が授業研究会を進行する役割を担う形式とした。

[2 日目]

「(7)模擬授業実施」では、各グループにてばれた代表者が模擬授業を実施した。各代表者は、シラバスや授業計画など授業紹介が 2 分、模擬授業実施が 15 分、コメントに 3 分、質疑応答に 5 分の計 25 分をとって進めた。模擬授業は、各自の専門科目の授業について基礎的な内容を取り上げて行われた。また、参加者やスタッフは、各自コメントシートにコメントを書き、発表者へのフィードバックを行った。

「(8) プログラムのまとめ」では、研修のまとめ、今後の全学 FD 推進プログラムの紹介を行った。

c. 成果と課題

■プログラムの到達目標に関する成果と課題

［到達目標①：FD 活動の理念、活動計画を理解する］

全学 FD 活動に関する理念、各種活動については、(1) オリエンテーションでの和田副学長による「徳島大学の教育と FD への期待」と、日置 FD 専門委員会委員長による「研修のねらいと意義」において、全学的な教育方針、全学 FD 推進プログラムの目的とその意義、本研修の目的、意義について説明があり、参加教員は徳島大学の全学 FD 活動について概ね理解したと思われる。

［到達目標②：授業を計画し、実施し、評価する方法を体得する］

SignificantLearning（意義ある学習）により、授業計画、評価の方法については、ワークを通して概ね理解したと思われるが、事前準備において、シラバス、授業計画の作成を実施する際に、FD ハンドブック参照のポイントを示しつつ作成を促す必要があった。また、研修中に再度そのポイントを振り返るためのチェックシートを設け、計画、評価の方法を伝えるのみではなく、日頃のシラバス作成の活動を振り返るための視点を意識化する機会を設定する必要がある。

［到達目標③：授業研究の仕方を理解し、実践できるようにする］

模擬授業の計画と準備、模擬授業を通して、評価視点のポイントを示しながら、相互評価を行う活動により、授業評価の視点の理解が促されたと考える。今回は、実践するために必要な枠組みを伝え、相互評価を行う機会を設けた事で、体験的に授業研究の方法について理解できる機会であったと考える。これについては、「授業コンサルテーション・授業研究会」も含め、今後参加者が実際の授業で継続的に実践できるような支援も必要であろう。

［到達目標④：FD 参加者同士の仲間づくりができる］

研修全体を通して、できる限り相互交流の機会を設け、お互いに研鑽し合う関係性の構築を意識した研修を実施した。具体的には、アイスブレイクで大学教員としての日頃の思いについて情報共有する機会を設けたこと、ワークショップにおいて、授業に対する価値観、理想の教員像や理想の授業、教育理念等について話し合う機会を設け、授業に対する考え方を相互に理解するための機会を設定した。また、模擬授業の計画、準備、実施においては、お互いの授業から学びつつ、相互に高め合う相互研鑽の関係性構築を促す機会とした。アンケートの「新たに人的なつながりをつくることができた」という質問に対して、80%の教員が肯定的に評価しており、関係性の構築という視点からは、本研修の成果が確認されたと考えてよいだろう。

■今後の課題

研修全体を通して、「研修は全体的に満足できるものだった」という質問に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的に評価した教員は全体の 70%であった。同様に「自分に必要な知識やスキルを身につけることができた」という教員は 75%、「受講したことによって教育への取り組み方が改善されると思う」という教員は 90%、「研修は自分の業務に活かせる内容であった」という教員は 95%であった。これらの結果から、多くの教員にとって、よい学びの機会であったことが分かる。しかし、一部の教員に対しては、ニーズに合った研修ではなかったことが考えられる。「研修内容をすぐに活用しなければならない状況で参加した」という教員は 55%であり。その他、半数近くが必要性を感じている状態ではなかった。また、「自分自身で能力開発の必要性を感じて参加した」という教員は 80%と高かったが、20%の教員が否定的な回答をしており、今回はこの研修内容がニーズと合致しない教員もいたことが推測できる。今後は個々のニーズに応じた支援を行っていく体制が必要であろう。

研修会場の快適さについては、参加者全員が肯定的に評価しており、特に大きな問題はなかったようであるが、設備面からみると 10%の教員が十分ではなかったと評価していたことから、より良い環境づくりを意識していく必要がある。

その他、「講師の用意した教材はわかりやすかった」という教員は 55%であり、教材作成について

表２　2011 年度教育力開発基礎プログラム

第１日（2011 年８月 19 日・金曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者
9:00－9:30	・受付　（共通教育棟６号館 201）	―
9:30－10:00	(1) オリエンテーション ・大学教育、FD・SD への期待 ・研修のねらいと意義 ・進め方とスタッフ紹介	川野卓二（進行） 副学長（教育担当） 和田　眞 FD 専門委員会委員長 日置善郎
10:00－10:30	(2) アイスブレイク「大学教員川柳」 ・参加者自己紹介・交流	川野卓二
10:30－11:40	(3) WS「よい授業・悪い授業」 ・KJ 法を用いて、授業の特徴をまとめる	吉田　博
11:40－12:40	休憩　　各自で昼食	
12:40－14:00	(4) WS「私の授業で大切にしたいこと」 ・授業イメージの明確化（個人ワーク） ・授業に関わる問題共有・相互支援（グループワーク）	香川順子 ワーク支援：スタッフ全員
14:00－15:35	(5) 講義・ワーク「よりよい授業実施のために」 ・授業設計と評価 ・参加型授業 ・シラバス、授業計画書の検討・修正	司会：宮田政徳 川野卓二
15:35－15:50	休憩	―
15:50－17:30	(6) グループワーク「模擬授業の計画と準備」 ・模擬授業実施代表者選出 ①各班で全員の模擬授業 ②授業後、よかった点、改善点について相互評価 ③模擬授業実施者の選出と役割分担決定	各班司会：FD 委員 ワーク支援：スタッフ全員

第２日（2011 年８月 20 日・土曜日）

時　刻	内　　容	講師・担当者
9:30－10:00	・集合、模擬授業準備	スタッフ
10:00－12:00	(7) 模擬授業実施（前半）（グループ代表が発表） A 班（10:00-10:30）、B 班（10:30-11:00） C 班（11:00-11:30）、D 班（11:30-12:00）	司会：宮田政徳
12:00－13:00	休憩　昼食(各自で)	コメンテーター：FD 委員
13:00－14:00	模擬授業実施（後半）（グループ代表が発表） E 班　（13:00-13:30）、F 班　（13:30-14:00）	支援：スタッフ全員
14:00－14:10	休憩	―
14:10－15:10	(8) プログラムのまとめ ・模擬授業のまとめ ・授業コンサルテーション、ﾃｨｰﾁﾝｸﾞ・ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵについて ・川柳賞授与 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	宮田政徳（進行） 川野卓二 香川順子 副学長（教育担当） 和田　眞 FD 専門委員会委員長 日置善郎

は改善を要する。以前の研修では FD ハンドブックを活用していたが、研修内容が変化したため、研修に対応した新たなテキストの開発が必要になろう。プログラムとしての全体の設計を見直し、再度テキストの整合性を図っていく必要がある。さらに、スタッフ間の連携を強化し、支援体制の見直しも含め、本プログラムを改善していく必要がある。

d. 初任者研修アンケート結果

最後に、プログラム終了直後に実施したアンケート結果について、自由記述の回答を示す。

(1) 現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識は何ですか。

・学生の評価方法
・講義の方法
・講義方法
・シラバス等で年間を通した授業を組むこと
・学生にとって学びやすいスライドや配布資料の作り方
・学問の背景（歴史上の出来事）
・外部研究費獲得方法
・全学生の顔と名前を覚える方法、滑舌、英会話
・講義一回での内容量を適切に設定すること
・The ability to organize the teaching resources to make clearer and attractive lectures, e.g. slides content, flow of talk.
・授業中の双方向性をうまく保つこと
・学生のやる気
・時間の効率よい使い方
・対話形式の授業

(2) 参加して良かったと思われる点を、具体的にお書き下さい。

・他分野の先生方の講義の仕事を体験できてとても良かったです
・専門は違ってもゴールは一緒と強く感じました
・参考になる所が多く活用させてもらいます
・自分以外の人の講義を見ることができ、良い点はぜひ取り入れさせていただこうと思った
・講義方法を確認できた
・様々な方と交流できた点
・他の先生と交流できたこと
・他の教員の声を直接聞く事が出来た
・他の教員の講義を直接見る事が出来た
・自分の講義を評価していただいたこと
・講義について参考になる意見を多数寄せられ今後に活用できる点
・PPT の使用例として他の先生の授業が見れた点
・様々な先生方の講義を聴くことができ、また相互に意見を述べることができ良い機会となりました
・The unique opportunity to see different teaching technique by peer lecturers regardless of the scholars field.
・自らをふりかえる機会を得たことが、最も良かったことです
・他の先生方の授業を聞き、非常に参考になった
・交流

(3) 研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば、具体的にお書き下さい。

・特に初日の時間的余裕がなかったです。それぞれのワークを“突貫工事”で行った感がありました。
・模擬講義の時間を長くしてほしい
・大きなホワイトボードを用意してほしい
・「15 分の模擬授業」といいつつ、45 分～90 分のものを 15 分にむりやり縮めたものだったりして、「ペースが速い」といった指摘に対し、発表者があわてて「実際の授業では…」などと「弁解」をはじめていました。「実際の授業の 15 分をそのまま取り出す」とか、「ガイダンス的科目で１トピックに限る」など、分量について規定を定めた方がよいのではないかと思います。
・模擬授業は、実際に行っている講義を 15 分に切り出してくるのでなければ意味がない。“15 分”なので、実情と異なる内容をパワーポイントでわざわざ作って行った先生も多数いるのではないだろうか。特に総合科学部以外の教員にとって事前準備は苦痛であった。または業務に大いに差し障ったであろう[注 2)]。
・FD よりも教員が教育研究に集中できる環境づくりから始めるべきである

・学生の参加者があっても良いかなと思いました
・Bilingual printed sheets. (Japanese & English)
・特にありません
・結局何をもって良い授業、悪い授業かがわからなかった
・ダラダラとしている時間が多かった
・FD といいながらスタッフの説明、講義など不備が目立った。スタッフがまずは教育能力を向上させないとダメでしょう。ただ、他の方の講義を受ける機会をもてたのは大変良かったです。

(4)その他、お気づきの点があればご記入下さい。
・大変参考になりました。スタッフの方々、いろいろありがとうございました。
・川柳は強制するものではない。“任意”にすべきである。我々は俳人ではない。
・（本内容であれば）4 月上旬に行う方が良いのでは
・教員の負担を平等にすべき
・おもしろい授業、わかりやすい説明が重要というわりに、各講義がこのクライテリアを満たしていなかったので説得力がなかった

4. 授業コンサルテーション

a. 授業コンサルテーションの目的

徳島大学では、全学 FD 推進プログラムの一環として、2005 年度より、毎年「授業コンサルテーション」を実施している。授業コンサルテーションでは、個々の教員の実情に沿った具体的で日常的な FD をめざしている。この授業コンサルテーションは、「教育力開発基礎プログラム」（8 月 19～20 日）の受講者が主な対象である。

b. 授業コンサルテーションの流れ

現在のところ、昨年度と同様に次のような流れで進めている。

教育力開発基礎プログラム（FD 基礎プログラム）
参加者の授業への参観・映像撮影・学生アンケート
↓
授業記録作成・学生アンケート整理
↓
授業研究会（発表・映像視聴・議論）
↓
目的：授業の把握、授業の改善、参加者間での授業技術の共有化

まず、センター教員と撮影担当者が、各教員の授業を参観し、簡単なメモ（授業まとまり、時間経過、特筆するべき発言や出来事）をとりつつ、授業を映像に収める。授業終了時には、学生へのアンケート（その日の授業で何を学んだかということと、授業に関する先生へのメッセージについて）を実施する。さらに時間があれば、教員に授業に関する簡単なインタビューを行う。

その後、授業映像をもとに、センター教員が詳細な授業記録を作成し、それと平行して授業の主要部分の映像を編集する。授業記録は、時系列に沿って授業の展開過程（まとまり、何が話されているか、学生との相互作用、板書など）がわかるように作成した。編集映像は授業の展開が分かるように、各まとまりから数分間の映像を抽出し、合計で 20 分強になるようまとめた。さらに、授業より数週間後、授業記録や編集映像、学生アンケート結果をもとにした「授業研究会」を開催する。そこでは、様々な部局からの参加者を交えて、授業改善の知恵を出し合ったり、また授業からいろいろなことを学び合うことを目指した。

c. 授業研究会

授業研究会は以下のような手順で進めた。所要時間は全部で 1 時間 20 分ほどである。これも昨年度と同様の手順である。

簡単な説明（授業全体のねらい／この日のねらいなど：対象者の先生より 5 分）
↓
授業映像視聴
↓
授業参観者報告・学生アンケートから読めること（大学開放実践センター教員より 5～10 分）
↓
授業者解説（当日の様子／授業でうまくいっている点・お困りの点など各論：対象者の教員より 5

～10 分）
↓
自由討論（あるいは課題討論 10～15 分）

徳島大学に着任した新任教員のうち、授業をもたない教員などを除き、2011 年度は 12 名の教員に対して授業コンサルテーションを行った。

また、2009 年 12 月より学部 FD 委員会との共催で、対象教員と同じ部局に所属する学部 FD 委員が常時授業研究会へ参加する形式となった。学部 FD 委員会との共催により、学部と連携を行いつつ専門的な立場から教員が参加する形となり、専門的な視点からも議論する体制を継続している。

授業研究会では大学開放実践センター教員のほか、対象教員が所属する部局等からの参加がみられた。なお、授業研究会は、授業研究インテリジェントラボでの開催を主としていたが、2011 年度より、対象となる教員の所属部局での開催を推進し、同領域の教員が参加しやすい環境づくりを目指した。2011 年度の授業研究会は次の通り実施された。

●第 1 回 2011 年 6 月 24 日（金）14:00～15：20
・開催場所：総合科学部 1 号館　第 2 会議室
・授業担当者：行實鉄平 講師（大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
・授業題目：『スポーツマネジメント論』
・共催：総合科学部 FD 委員会
・議論内容：この授業では、その日の授業の感想や質問を書き込むコミュニケーションカードを利用し、学生とのやりとりを重視した講義が行われていた。

自由討論では、コミュニケーションカードを利用して学生個人の意見をまずまとめてもらい、それをもとに他の学生と議論し、その結果を再度カードにまとめるといった、学生同士の相互作用によって思考を促す工夫や、テキストで引用されている理論と教員の考え方の違いを示し、その理論に対する考え方について学生に議論してもらう工夫等が議論された。

●第 2 回 2011 年 6 月 30 日（木）14:00～15：20
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
・授業担当者：山﨑尚志 准教授（大学院ヘルスバイオサイエンス研究部）
・授業題目：『基礎化学Ⅲ』
・共催：薬学部 FD 委員会
・議論内容：この授業では、授業での重要なポイントを押さえ、「ここが大事なところです」、「ここは覚えてください」と言葉で分かりやすく強調することや、スライド資料を穴埋めにしたり、追加の話題が分かるように印を入れたりするなど、学生の理解を促すための熱意ある授業が行われていた。

自由討論では、スライドの資料が多くなり過ぎないように配慮することの重要性や、スライドと板書の長所を活かした授業、他教員の担当する科目内容を把握し、つながりを意識しながら授業設計を行う努力をする一方で、カリキュラム全体を見直し、改善する必要性についても議論された。

●第 3 回 2011 年 7 月 20 日（水）10:30～11：50
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
・授業担当者：田村隆雄 准教授（大学院ソシオテクノサイエンス研究部）
・授業題目：『地域の環境と防災』
・共催：工学部 FD 委員会
・議論内容：この授業では、技術者として何が必要かという視点を重視し、ビデオ教材の活用やスライドを用いたクイズの実施など、身の回りの自然環境に関する事例を取り上げ、学生の理解を促す工夫が行われていた。

自由討論では、モチベーションの低い学生をどのように授業へ参加させるかといったことが中心に話された。授業に参加するという姿勢を保つために、座席表を作成して、学生に名前を記入してもらい、寝ている学生は欠席扱いにすると伝える方法や、クイズの際にカードを作成して学生同士が確認できるようなグループワークを取り入れる方法、ビデオを見る際に学生自身の考えを記入するワークシートを活用して何か作業を取り入れる工夫などが議論された。

●第４回 2011 年９月 30 日（金）14:00〜15：20
・開催場所：工学部総合研究実験棟（エコ棟）605 会議室
・授業担当者：佐藤克也 講師（大学院ソシオテクノサイエンス研究部）
・授業題目：『エコシステム工学』
・共催：工学部 FD 委員会
・議論内容：この授業は、再生医療をテーマに、特に骨の再生技術に関する授業である。この再生医療は、医学、生物学だけではなく、工学の分野でも注目されており、授業の中ではエンジニアとして貢献できる領域が示され、学生の視野を広げるとともに、興味を引く工夫が行われていた。また、学生の集中力を高めるために、授業の要所で数分間の課題を３回に分けて設定し、学生がその場で回答して授業の最後に提出するという工夫もなされていた。

自由討論では、課題の提示の仕方について中心に議論され、学生の集中を高めるには、講義の後に課題を提示して回答させること、課題によって授業を理解するための思考が途切れないように、課題の問いに、ある程度の補助情報を提示する必要性について話された。また、教材を配布する際に、穴埋めにするなど全ての情報を載せて配布しないこと、著作権の理由から配布が難しい教材の場合には、講義用、配布用の資料を作成する必要があることなどが話された。その他、大学として著作権等のガイドラインを提供することの必要性について議論された。

●第５回 2011 年 11 月 28 日（月）17:00〜18：20
・開催場所：保健学 C 棟 C－13
・授業担当者：藤井智恵子 講師（大学院ヘルスバイオサイエンス研究部）
・授業題目：『ケアマネジメント』
・共催：医学部 FD 委員会
・議論内容：この授業では、医療保険制度について、医療従事者としての役割を意識しつつ、制度を理解していくことを重視した授業である。講義スタイルの授業では、学生にとって身近な事例や具体例を示しながら解説がなされていた。また、各制度の違いの理解を促すよう、健康保険と国民健康保険の違いを具体的にあげながら説明し、学生が興味を持ち、理解しやすい形で授業が行われていた。

自由討論では、講義形式の授業で、全体への質問や問いかけをした場合に、反応のない学生をどのように参加させるか、配布資料について学生が自ら学習を進めるためにはどのような配布資料がよいのか（親切すぎてもよくない）、事前に配布資料を渡して予習をしてもらうことにより理解が進むこと、礼儀作法というところからも教育していくことの必要性などが議論された。

●第６回 2011 年 11 月 29 日（月）16:00〜17：20
・開催場所：化学・生物棟 209 号室（化学応用学生実習室）
・授業担当者：中川敬三 講師（大学院ヘルスバイオサイエンス研究部）
・授業題目：『反応工学演習』
・共催：工学部 FD 委員会
・議論内容：この授業は、反応工学の知識を身につけ、理解を深めることを目的に練習問題を解いて、解説を行う演習形式で行われている。この授業で出題される問題は英文で書かれており、反応工学に関する基礎的な用語を英語で確認し、その後日本語訳を丁寧に行いながら進められていた。これは、学生が将来、海外の文献や論文を参照する際に、少しでも苦手意識を軽減したいという思いで、教員が工夫している点である。また、問題を解く時間を設け、その際には学生の質問を個別に受け、解説の中でも学生に質問を何度も投げかけるなど、学生とのやり取りを行うことを重視した授業であった。

自由討論では、授業のペースについて教員より問題提起がなされ、同分野の教員と授業の進め方、演習時間の配分、授業外学習の量などについて議論が行われた。とても丁寧でわかりやすいという学生の声が多い反面、授業のペースが遅くなってしまい、解く問題の数が少なくなってしまうという問題に対し、同僚教員の中でも、多様な意見が提示され、授業外での学習を

うまく活かし、学生に身につけてもらいたい内容はカバーできるように進めていくことの重要性について議論された。

●第７回 2011年12月14日（水）9:00〜10：20
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
・授業担当者：座喜　純 准教授（大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
・授業題目：『実用外国語演習（英語）』
・共催：総合科学部FD委員会
・議論内容：この授業は、英語を話すことに苦手意識を持つ学生が、英語を自由に話せるよう工夫されている。具体的には、第一に、テキストは一切使わず、学生が興味を持つテーマでレポートを書かせ、それを英語で発表する形式を導入していること、第二に、発表の際に、参加者全員が英語で質問し、それに対して発表者が英語で答えるといった相互のコミュニケーションを重視したディベートの実践を取り入れていることである。教員は、発表者の英語の間違いを修正したり、質問者の英語を分かり易く言い直したりすることによって、スムーズなディベートが進行するよう支援者としての役割を担っていた。

　自由討論では、文法的間違いを恐れて英語を話すことに抵抗のある学生が間違っても、教員が丁寧にガイドすることにより、積極的なディベートへの参加が促された事例が紹介された。また、自由なディベートにより、話題が白熱し、面白い展開になった事例についても紹介された。授業運営の難しさとして、留学経験者や帰国子女の参加により、他の学生が沈黙してしまう傾向があることが指摘され、英語が堪能な学生を対象とした「上級英語スピーキングクラス」などの特別講義を開講する必要性について話された。また学内で英語スピーキングを活性化するために、「英語スピーチコンテスト」や「英語ディベート大会」の開催が提案された。

●第８回 2011年12月22日（木）14:00〜15：20
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
・授業担当者：田嶋　敦 准教授（大学院ヘルスバイオサイエンス研究部）
・授業題目：『人類遺伝／公衆衛生』
・共催：医学部FD委員会
・議論内容：この授業では、授業の要所で「質問」を提示し、学生の思考を促す時間を設定されていること、また、遺伝学への興味や理解を促すための事例や工夫を取り入れ、丁寧な授業が行われている。教員の設定する「質問」では、「Hardy-Weinbergの法則」に関する計算や、親子や兄弟など遺伝子を共有している割合の高い組み合わせを回答するといったように、理解を促したいポイントで考える時間が設定されていた。また、特定の範囲の色の差を感じにくい視覚特性を持った人に対して配慮した「色覚バリアフリー」を意識した資料を作成し、「遺伝的多様性」の理解へつなげる工夫や、集団遺伝に関する法則のシミュレーションを準備するなど、多くの工夫がされていた。

　自由討論では、国家試験に遺伝学の領域が少ないことにより、授業が少なく、今後発展していく分野として、新たな科目を設定する必要性があること、現在は短い時間の間で、基礎から応用まで多くのことを伝えることの難しさがあることなどが話された。また、参加意欲のない学生を参加させるため、座った席に名前を記入し、誰がどこに座っているか確認できるようにすることで、学生も参加しようと努力するようになり、クラス全体の雰囲気もよくなることなどが話された。

●第９回 2012年１月11日（水）13:30〜14：50
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
・授業担当者：名田　譲 講師（大学院ソシオテクノサイエンス研究部）
・授業題目：『エネルギー変換システム論』
・共催：工学部FD委員会
・議論内容：この授業では、全体を通した丁寧な説明と、学生の理解を促す工夫が行われている。書き込み式のスライド資料の配布や、数式やグラフを板書することによって、思考過程に沿った説明をするなど、スライドと板書の長所を活かしている点、また、具体例を取り上げたり、

計算式と単位を関連付けたりするなどの理解を促す説明の工夫、学生の集中力を保つために途中休憩を入れるなど、きめ細やかな対応をされている。

自由討論では、評価をどのように行うか、組織体制の変化に伴い、多様な学生が受講するようになった場合のレベル設定と授業内容の組み方等について議論がなされた。評価に関しては、シラバスの到達目標に、この授業を受講することで「何ができるようになるか」といった具体的なレベルで目標設定することの重要性について確認がなされた。さらに、目標の階層構造を明確にし、それを学生と共有することで、学生が事前に学習しておくべき事柄をわかりやすく伝えておくこと、学生が自主的に学べるようなガイド情報を提供することによって授業の難易度を落とさず維持していけるのではないかといった事が話された。その他、授業内容について、関連科目の教員と話し合う機会を設けることの必要性や、フィールド調査等でやむを得ず欠席しなければならない学生に課する課題について、それを提出すれば欠席した授業で理解すべき事柄を網羅できるものに設定しておくことなどの情報共有がなされた。

●第 10 回 2012 年 1 月 24 日（水）13:00〜14：20
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
・授業担当者：吉岡宏祐 講師（大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
・授業題目：『アメリカ社会の諸問題』
・共催：総合科学部 FD 委員会
・議論内容：この授業では、学生–教員、学生間の相互のやり取りを重視した授業が行われている。具体的には、講義をしながら「ワーキング・プアとはどのような人々のことでしょうか？」といったように要所で質問し、学生に応えさせることで理解を促す工夫や、学生がペアになり、アメリカ社会の諸問題について様々な論争をテーマにディスカッションを行うといった工夫が取り入れられている。ディスカッションでは、「刑務所ビジネスの実態」や「アファーマティブ・アクションに関する経済的理論」を取り上げ、テーマに基づいた議論を行った後、学生の考えをワークシートにまとめるというプロセスもとられている。

自由討論では、ディスカッションを行う際に、対立する考え方（理論）提示した上で議論させてみてはどうかといった提案や、質の良い議論を導くために、教員が意図する議論を誘導するような設問を設定することの重要性、より議論を促すために、議論の準備と思考のプロセス（言葉の意味の理解→個人の意見のまとめ→議論→議論のまとめ）を誘導する工夫について話された。

その他、座っている席に名前を記入してもらうよう記名表をまわすといった出席の取り方、配布資料を冊子として配布する方法、講義の際に学生が考えるきっかけとなる問いを配布資料等に入れこみ、課題の際にその問いの中から出すようにすること、手を動かしてノートをとるようにあえて詳しい資料を提供しない方が、学生も緊張感を持って集中して臨むようになることなどの情報共有が行われた。

●第 11 回 2012 年 2 月 24 日（金）17:00〜18：20
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
・授業担当者：永井宏和 准教授（大学院ヘルスバイオサイエンス研究部）
・授業題目：『口腔外科学』
・共催：歯学部 FD 委員会
・議論内容：この授業では、解剖や手術の手順について、図による解説や実際の手術の写真、映像を活用することにより、手術の具体的なイメージをつかめるよう意識した講義が行われている。手術では関連する分野の知識統合が必要になることから、学生が臨床を学ぶ前に、必要な知識を学ぶ事の重要性に気づかせ、自主的に専門知識を学びとっていくような関わりを意識した講義である。また、国家試験のポイントを提示し、学生の将来へつなげる講義を重視している。

自由討論では、医療分野の新たな知識が常に更新され、学ばなければならない内容が増える中で、「どこまで教えるか？」が難しく、自己

学習を促す関わりが重要になってくることが話された。授業内容を多くしがちではあるが、ある程度ポイントを絞って内容を決めていくことに加え、学生に、もっと学ばなければ困るということに気づかせ、なぜ学ばなければならないのか？学びの意義を伝えていくことも必要であることが共有された。

また、年々国家試験も難しくなり、臨床も重視される中で、そこへつなげて授業を設計してくことの重要性なども話された。

●第 12 回 2012 年 2 月 27 日（月）10:00〜11：20
・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
・授業担当者：蒋　景彩 准教授（大学院ソシオテクノサイエンス研究部）
・授業題目：『基礎の流れ学』
・共催：工学部 FD 委員会
・議論内容：この授業では、課題を出すことで学生の理解を把握しながら、学生が間違いやすいポイントを強調して解説が行われている。また、板書をうまく活用し、理解すべきポイントを左側に残しながら、計算過程を別にして板書するなどの工夫や、イメージしやすい身近な事例を用いた説明、これから学ぶ事がどのような意義を持っているのかといった学びへの喚起をするなど、学生の理解と学びを促す、きめ細やかに対応している講義である。

自由討論では、カリキュラムの変更により、他科の学生も受講する総合科目になったことから、物理の知識を必要とする授業ではあるが、それが十分ではない学生も受講することになり、教員一人では解決しきれない問題があることが話された。努力すれば、合格できるよう設計をしているが、教員だけではなく学生の努力も必要であることが議論された。

また、他分野であっても、学生がなぜこの科目を学ぶ必要があるのかについて、異分野交流の重要性や自分の専門につなげて考えていくことの大切さを理解できるように伝えていくとよいのではないかということが共有された。

5. FD・SD セミナー

FD・SD セミナーは日常的な教育活動ですぐに役立つ知識、スキルを参加者間で共有すること、また教育・学生支援に関するテーマについてディスカッションを行うことを目的に開催している。会場は、いずれも大学開放実践センター3 階の授業研究インテリジェントラボを使用し、徳島大学の教職員、学生だけでなく、SPOD 加盟校の教職員も対象に実施した。また、遠隔会議システムを用いて学外への配信を行い、参加を募集した。

●第 1 回 FD・SD セミナー（参加者：22 名）
【日時】2011 年 5 月 20 日（金）16：30〜18：00
【テーマ】授業時間外の英語学習支援体制について
【話題提供者】
福田スティーブ利久（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
坂田浩（徳島大学国際センター）
ギュンター・ディルク（徳島大学全学共通教育センター）
藤川夏美（徳島大学総合科学部 4 年）
奥野啓輔（徳島大学総合科学部 3 年）
【内容】はじめに坂田先生より「英語学習に求められるもの」というテーマで英語学習理論が紹介され、本学の英語学習環境が概説された。その中で多くの学生は「英語力を伸ばしたい」と思っているが、どうやって伸ばせばよいか分からず不安を感じているという現状が報告された。このような現状を踏まえて、英語教員の仕事として、授業外で英語を実際に使う場所を作るため、留学生と話をする「英語チャットルーム」の取り組みを、始めたいきさつも交えながら紹介があった。次に福田先生より 3 年目となる「英語サポートルーム」の取り組みについて紹介があり、その理念は真の学びを目指した寺子屋にあることが強調された。それは「学び」は一人ではなく他者との相互交流によって行われるということであり、このことを成人学習理論を紹介しながら説明された。続いて、「英語サポートルーム」によって英語力を伸ばし、自己啓発をやり遂げた例として、「英語サポートルーム」の経験談を、総合科学部 4 年の藤川夏美さ

んと 3 年の奥野啓輔さんが発表した。2 人は「英語サポートルーム」が自分たちにどのような素晴らしい効果をもたらしたのかを、具体例を交えながら紹介した。最後にギュンター先生から「英語サポートルーム」の課題や今後展望について紹介があった。その後のディスカッションの時間には、多数の参加者と熱のこもった討論が英語と日本語を交えて行われ、今後の徳島大学の英語教育を多方面から考えるよい機会となった。

●第 2 回 FD・SD セミナー（参加者：24 名）
【日時】2011 年 6 月 30 日（木）16：30〜18：00
【テーマ】学生と共に進める徳島大学の FD&学生支援の展望
【話題提供者】
今井早苗（徳島大学総合科学部 2 年）
野勢祐樹（徳島大学総合科学部 2 年）
日置善郎（徳島大学大学開放実践センター）
吉田　博（徳島大学大学開放実践センター）
【内容】はじめに、徳島大学の自主的な学生団体の「しゃべり場企画チーム（現在、繋ぎ create）」から総合科学部 2 年の今井早苗さん、「Ways！」から総合科学部 2 年の野勢祐樹さんが、活動目的、活動内容等を紹介した。これらの学生団体は 2010 年 11 月に発足し、新入生への履修支援活動、学生と教職員が集まり、テーマに応じてコミュニケーションを行う場（しゃべり場等）の提供など、学生自身が企画し自主的に活動を進めている。続いて、日置先生より全学 FD の紹介、吉田先生より他大学で行われている学生が参画する FD や学生支援の事例紹介がなされた。その後、徳島大学が目指す学生を巻き込んだ FD や学生支援とは何か、FD や学生支援に参画する学生をどのように位置づけるのか、またその学生と教職員との関係について、全体で自由討論を実施した。討論では、学生が FD に関わるべきかどうかについて、学生・教員の考える「良い授業とは何か？」、FD・SD 活動に参加しない教職員、学生の意識をどのように変えるか、といった事について、学生、教職員双方から活発に議論がなされた。このような機会や場をつくり継続して議論していくことや、教職員、学生が活動を協働して行うことの重要性が共有された。

●第 3 回 FD・SD セミナー（参加者：18 名）
【日時】2011 年 9 月 9 日（金）16：30〜18：00
【テーマ】「共通教育賞」受賞者から学ぶ授業改善
【話題提供者】
Gehrtz−三隅友子（徳島大学国際センター）
有馬卓也（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）
金西計英（徳島大学大学開放実践センター）
【内容】2010 年度前期・後期「共通教育賞」受賞の Gehrtz−三隅友子先生（日本語 7、日本事情Ⅳ）、後期「共通教育賞」受賞の有馬卓也先生（中国占夢小説研究）、金西計英先生（情報メディアと教育）に、学生から高く評価されるまでの経緯や授業で工夫している点を紹介してもらい、参加者間で共有を行った。

三隅先生は、対話を重視したプロジェクトワーク型の授業を実施しており、協同学習、学習・プロジェクトの成果発表等を通して、現実の学び、学生の主体的な活動、体験を重視した授業の取り組みを紹介した。有馬先生は、学生のモチベーションを高めるために工夫していること、受講生との約束をつくり徹底すること、成績評価の仕方を明確に伝え、きめ細やかなフィードバックを行うこと、具体的な授業の工夫点について多くの事例を紹介した。金西先生は、大人数授業における学生主体の学習をどのように実現しているのか、グループ学習を中心に行う「橋本メソッド」や、学生と教員とのやりとりを行う「大福帳（シャトルカード）」を取り入れた授業について紹介があった。各先生の取組紹介の後は、簡単に質疑応答が行われ、参加者にとっては、自身の授業における改善のヒントになる戦略や工夫点を共有する機会となった。

●第 4 回 FD・SD セミナー（参加者：34 名）
【日時】2011 年 12 月 9 日（金）10：30〜12：00
【テーマ】ティーチング・ポートフォリオ入門
【話題提供者】秦　敬治（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 副室長・教授）
【内容】今回は、遠隔会議システムを利用して、徳島文理大学徳島キャンパス、徳島文理大学香川

キャンパス、高知大学、高知県立大学、高知工業高等専門学校の 5 地点にもセミナーを配信して実施した。

はじめに秦先生より「ティーチング・ポートフォリオ(以下 TP)」とは何であるか説明があった。ここでは TP の役割、活用事例、海外の高等教育機関における導入の現状が紹介された。TP を作成するときは、合宿形式のワークショップにおいて 3 日程度集中して行う場合が多いということである。ワークショップでは、メンターの役割が重要であり、メンティー（TP 作成者）はメンターとのやり取りの中で、自分の知らない自分に気づくことができ、自身の教育理念を明確にすることができるという。続いて 2 つのワークを実施した。1 つ目は、メンターとメンティーの関係を体験する「なぜ？なぜ？ワーク」である。これは、ペアをつくり「なぜ大学教員になったのか？」「どのような大学教員になりたいのか？」の本音を深く掘り下げていくものである。2 つ目は、日々の教育活動の中で自身が大切にしていることを KJ 法を用いてまとめることで、TP を作成する際の手順を簡単に体験できるものであった。セミナーは 90 分であったが、TP の概説から作成する際の留意点等を簡単に体験することができ、参加者は TP を身近に感じることができたのではなかろうか。

6. 大学教育カンファレンス in 徳島

【会期】2012 年 1 月 6 日（金）8：50〜18：00

【会場】徳島大学大学開放実践センター

【概要と成果】

第 4 期全学 FD プログラムの第 1 年目に当たる今年度の教育カンファレンスは、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）との共催行事として昨年に引き続き「大学教育カンファレンス in 徳島」の名称で実施し、徳島県内の他大学・高専からの発表も行われた（表 3）。今回は開催時期を冬季休業中の 1 月 6 日に移したことにより、教員・学生の参加者の増加を見込んだ。今回の発表件数は、口頭発表 24 件、ポスター発表 18 件、ワークショップ 1 件、ラウンドテーブル 2 件であった。今年度の発表の大きな特徴は、限られた時間内にできるだけ多くの発表を聞くことができるように、口頭発表の時間が 13 分間に短縮されたことである。また、これまでの創生学習関連の学生による発表に加え、学生の学びをサポートする学生支援活動に関わった学生が発表代表者となる口頭発表件数の増加、および全学共通教育で外国語を教えている非常勤講師による発表があったことが挙げられる。

特別講演として、立命館大学教育開発推進機構の鳥居朋子教授による講演が「学士課程カリキュラムの開発への視点――目標との整合および学生実態の把握から――」と題して行われた。他大学・高専からの発表として、口頭発表 2 件、ポスター発表 2 件があった。また、ラウンドテーブル Ⅱ「授業で工夫していること〜学生のやる気を引き出すために〜」のセッションでは、4 名の教員（うち他大学・高専から 3 名）による話題提供があった。すべての発表終了後に情報交換会を開催した。参加者は、学外からの参加者 46 名を含む、173 名であった。また、情報交換会への参加者は 29 名であった。

注

1) SoTL（Scholarship of Teaching and Learning）については、次のサイトに紹介されている。
http://www.issotl.org/

2) 模擬授業では、普段の授業、あるいは今後予定のある授業のワンシーンを選び、実施する事を意図しているが、参加者へ十分に説明が伝わっていなかったため、これも改善が必要である。

表３　平成23年度 全学ＦＤ大学教育カンファレンス in 徳島 プログラム

会期：2012年１月６日（金）　会場：徳島大学大学開放実践センター

8：30〜 8：50	受　付　　＜大学開放実践センター1階玄関前＞		
8：50〜 9：00	学長挨拶　香川 征＜第１講義室＞ *司会：日置善郎*		
9：00〜 10：00	***口頭発表Ａ*** *座長：前澤博* **＜第１講義室＞** Ａ① 9：00〜9：15 ■知的財産権を活用した自主的創造力創出教育手法の開発 大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部 出口祥啓他	***口頭発表Ｂ*** *座長：小山晋之* **＜第２講義室＞** Ｂ① 9：00〜9：15 ■モンゴル国における1st International Student Conference 開催の意義 医学部栄養学科２年 原田愛弓他	
	Ａ② 9：15〜9：30 ■長期インターンシップによる大学院生の持続可能な産学連携教育のあり方 創成学習開発センター 森本恵美他	Ｂ② 9：15〜9：30 ■総合科学部社会創生学科「文系数学の基礎」の授業開発と実施 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ 研究部豊田哲也他	
	Ａ③ 9：30〜9：45 ■第２回工学教育に関するアジア会議（ACEE 2011）を開催して 創成学習開発センター 英崇夫他	Ｂ③ 9：30〜9：45 ■キャンパスライフにおける問題点から見える学生支援ー問題の洗い出しから具体的な支援までー 大学開放実践センター 吉田博	
	Ａ④ 9：45〜10：00 ■創成学習開発センターの学生による自主創成活動 工学部機械工学科２年 田村和大他	Ｂ④ 9：45〜10：00 ■大学生による交流型ワークショップの成果と課題ー「キャンパス・ビジョン」の企画・開催を通してー 工学部電気電子工学科３年 浦邊研太郎他	
10：00〜 10：05	休　憩		
	座長：田中秀治 **＜第１講義室＞** Ａ⑤ 10：05〜10：20 ■「教える」ということ,「学ぶ」ということ第２報〜科学イベントで学生 TA が学んだもの・こと〜 創成学習開発センター 続木章三他	*座長：伊賀弘起* **＜第２講義室＞** Ｂ⑤ 10：05〜10：20 ■大学生が考える在学中になすべき活動ーDEEP PEOPLEの企画から見えてきたものー 総合科学部人間文化学科１年 牧迫雄也　他	***ラウンドテーブルⅠ*** *座長：金西計英* **＜6-201 講義室＞** 10：05〜12：10 ★学生への心理支援の実状と課題

10：05〜 11：05	Ａ⑥ 10：20〜10：35 ■地域の科学リテラシー普及を目指して 総合科学部社会創生学科３年 和崎美穂他	Ｂ⑥ 10：20〜10：35 ■学生による履修相談の取り組みの成果と課題ー行列のできる履修相談じょ及び抽選漏れのための履修相談じょの実施からー 総合科学部社会創生学科２年 野勢祐樹他	
	Ａ⑦ 10：35〜10：50 ■日亜 STC 〜この１年の取組み〜 大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部 菊池淳他	Ｂ⑦ 10：35〜10：50 ■学生による学び支援ー Ways Café-ぷちの企画・開催を通してー 総合科学部社会創生学科２年 光宗榮他	
	Ａ⑧ 10：50〜11：05 ■大学生による小中高生向けロボット教室プロジェクトとその相互評価 工学部機械工学科２年 渡辺照久他	Ｂ⑧ 10：50〜11：05 ■徳島大学生の学外研修における学びー全国の学生対象ワークショップへの参加を通してー 工学部電気電子工学科３年 野中亮 他	
11：05〜 11：10	休　憩		
11：10〜 12：10	*座長：堤和博* **＜第１講義室＞** Ａ⑨ 11：10〜11：25 ■参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）における学生の満足度に関連する要因について 医学部教育支援センター 三笠洋明他	*座長：上田哲史* **＜第２講義室＞** Ｂ⑨ 11：10〜11：25 ■Art and Culture Exchange 学生プロジェクトによる社会貢献と異分野間連携への取り組み 総合科学部科目等履修生 福岡佑子他	***（ラウンドテーブルⅠ）*** *座長：金西計英* **＜6-201 講義室＞** 10：05〜12：10 ★学生への心理支援の実状と課題 1. 早期対応のための心理支援体制 保健管理センター 二宮恒夫 2. 面接実施方法と今後の課題 学生支援ｾﾝﾀｰ学生相談室 山本真由美 3. 健康診断を利用した学生のメンタルヘルス支援 保健管理センター 井﨑ゆみ子
	Ａ⑩ 11：25〜11：40 ■養護教諭および歯科衛生士養成における多職種連携教育の試み 大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部 奥田紀久子他	Ｂ⑩ 11：25〜11：40 ■大学における日本語教育①ープロジェクトワーク型日本語教育の効果 国際センター大石寧子	
	Ａ⑪ 11：40〜11：55 ■アニメーション作品を取り入れた心理学授業の実践ー「移行対象」と「ドラえもん・おばあちゃんの思い出」ー 四国大学生活科学部 下坂剛	Ｂ⑪ 11：40〜11：55 ■大学における日本語教育②「わかる」ではおわらない、「できる」授業へ 国際センター橋本智	
	Ａ⑫ 11：55〜12：10 ■卒業生満足度アンケートの解析 徳島文理大学理工学部 小林郁典他	Ｂ⑫ 11：55〜12：10 ■基礎科目におけるクリッカーの効果 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ 研究部齊藤隆仁	
12：10〜 13：10	昼食休憩		

13：10～ 14：40	**特別講演**　*司会：川野卓二*　＜第１講義室＞ 演題：「学士課程カリキュラムの開発への視点 ー目標との整合および学生実態の把握からー」 講師：鳥居朋子先生（立命館大学教育開発推進機構教授）
14：40～ 14：50	休　憩
14：50～ 16：50	**ラウンドテーブルⅡ** *座長：日置善郎* ＜第１講義室＞ ★授業で工夫していること～学生のやる気を引き出すために～ 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 余郷裕次 阿南工業高等専門学校機械工学科奥本良博 四国大学短期大学部・学修支援センター 谷川裕稔 徳島大学大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ研究部 伏見賢一 **ワークショップ** *座長：西尾芳文* ＜授業研究インテリジェントラボ＞ ◆教師のための「教える・学ぶ・ケアする」ワークショップ 徳島文理大学 牧裕夫 国際センター Gehrtz 三隅友子
16：50～ 17：00	休　憩
17：00～ 18：00	**ポスター発表**　*座長：香川順子*　＜１階ロビー＞ ●高大連携事業「高校生の大学研究室への体験入学型学習プログラム」実施報告（第３報）Ｐ① 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ研究部渡部稔他 ●学習支援ボランティアに対する学内支援体制と内容　Ｐ② 大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ研究部山本真由美 ●看護系大学１年生に実施した高齢者ふれあい実習の初年度における効果と課題ー学生の授業評価よりーＰ③ 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部安原由子他 ●医療技術系大学生が受講する「ヒューマンコミュニケーション：社会人としてのマナーを学ぶ」の授業方法と課題ー学生の授業評価よりーＰ④ 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部關戸啓子他 ●医療職を目指す多専攻の学生が合同で履修する「人間関係論」の課題ー学生の授業評価よりー　Ｐ⑤ 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部關戸啓子他 ●グループ・ワーク型授業を活性化させるための取り組みーコックピット・リソース・マネージメントの授業への応用ーＰ⑥ 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部　岩佐幸恵他 ●医療系学部における多職種連携教育（IPE）の取り組み～蔵本キャンパスすべての１年生による合同ワークショップ～Ｐ⑦ 大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部医療教育開発センター岩田貴他 ●学外体験学習における教育管理システムの運用とその効果　Ｐ⑧ 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部　中江弘美他 ●学生の実習成果向上を目的とした学外実習施設指導薬剤師と徳島大学薬学部実務家教員の連携指導の実施と検証　Ｐ⑨ 大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部臨床薬学実務教育室里吉良子他

17：00～ 18：00	●Faculty センター、Teaching&Learning センターの役割ーブリガム・ヤング大学（プロボ）の場合ーＰ⑩ 大学開放実践センター川野卓二 ●橋本メソッドを用いた大人数授業での授業デザインについて　Ｐ⑪ 大学開放実践センター金西計英他 ●徳島大学のイングリッシュ・サポート・ルームについてＰ⑫ 全学共通教育センターギュンターディルク ●徳島大学のイングリッシュ・サポート・ルームにおける特別プログラム「クリエイティブ・ライティング」の実施とその結果についてＰ⑬ 全学共通教育センター（非常勤講師）鎌田スザーン ●徳島大学のイングリッシュ・サポート・ルームにおける特別プログラム「英語の発音」の実施とその結果についてＰ⑭ 全学共通教育センター（非常勤講師）ポンドクリス ●徳島大学のイングリッシュ・サポート・ルームにおける特別プログラム「礼儀正しい英語」の実施とその結果についてＰ⑮ 全学共通教育センター（非常勤講師）パトリックジェフリー ●4 年一貫就業力育成プログラムとそれに基づく初年次キャリア教育の実践ー大学生の就業力育成支援事業採択[自らの就業力向上を促す巣立ちプログラム]ーＰ⑯ 就職支援センター・キャリア教育推進室田中徳一他 ●「看護技術」演習をグループで効果的に進めるための取り組み　Ｐ⑰ 徳島文理大学保健福祉学部看護学科古川薫他 ●高専におけるティーチング・ポートフォリオの広がり　Ｐ⑱ 阿南工業高等専門学校松本高志他
18：30～ 20：30	情報交換会　＜学生会館大集会室＞